

## 文学に見る人種偏見

—19世紀アメリカを例に—

米山正文 (宇都宮大学)

### Racial prejudice in nineteenth-century American fiction

Masafumi Yoneyama (*Utsunomiya University*)

(2014年12月29日受稿, 2015年5月14日受理)

This paper aims to elucidate how antebellum American fiction addresses the modern ideology of race. It examines how African-American characters are represented in *The Yemassee* (Simms, 1835), *Westward Ho!* (Paulding, 1832), *Swallow Barn* (Kennedy, 1832), *Uncle Tom's Cabin* (Stowe, 1852) and *The Red Rover* (Cooper, 1828). It contends that unlike the other novels, *The Red Rover* resists racial prejudices by focusing on the comradeship among sailors of different color.

**Key words:** American fiction, race, prejudice, ideology, 19th century

#### 1. アメリカの人種主義と19世紀前半の文学

19世紀アメリカの黒人作家フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass, 1818-1895) は自伝 (1855) の中で、自身が“肌の色への偏見 (prejudice against color)”と呼ぶ人種差別の体験について語っている<sup>1</sup>。すでに奴隷制の廃止されていた北部でも、教会や汽車などで人種隔離が慣習化している。その後人種隔離が禁止されても、汽車の中で白人はダグラスの隣の席に座ろうとしない。最も進歩的と考えられる奴隷制廃止運動家でさえ、“ダグラスさん、集会まで一緒にします。私は黒人を恐れてはいませんので”などと言い、ダグラスは“自分の見た目にそんなに恐れるものなどないのに”と思い“なぜ恐れなければいけないのですか”と逆に尋ねたくなるという。ダグラスによれば、北部の子供たちは、悪い子だと“年老いた悪魔”ではなく“年老いた黒人の男”に捕まえられると教え込まれる。それゆえ、白人は黒人への恐怖を克服する

ために相応の勇気が必要になるのだというのである (Douglass, 1994, p. 361, pp. 392-395, 傍点部分, 原文はイタリック)<sup>2</sup>。

ダグラスが生きた19世紀前半のアメリカは、人種主義 (racism) が確立しつつある時代であった。文化人類学者のオードリー・スメドリーによれば、人種主義は18世紀末から19世紀初頭にかけて、それ以前の漠然とした偏見から体系化されたイデオロギーへと結晶化したものである。そのイデオロギーの特徴をスメドリーは列挙しているが、主要な点を抽出すると以下のようになる。(1) 人種とは排他的で特色のある個々の人間集団を意味し、一人の人間は一つの人種にしか属することができない。(2) 人種は本来不平等なものと考えられ序列化された。(3) 様々な人種の身体上の特徴は、行動上、知性上、道徳上、気質上の差異と因果関係があるとされた。(4) 生物学的的身体的特徴と行動上の特徴は、どちらも遺伝による先天的なものであると考えられた。(5) 人種間の差異は、神あるいは自然によって創造されたもので、固定的で変更不可能なものと考えられた (スメドリー, 2005 山下訳 pp. 168-170)。人種偏見の起源にはもちろん西欧列強による征服と植民地化があるわけだが、世紀転換期における、こうした人種イデオロギーの確立

Correspondence concerning this article should be sent to: Masafumi Yoneyama, Utsunomiya, Tochigi, 321-8505, Japan (e-mail: yone@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

<sup>1</sup> 本稿では作品が書かれた19世紀当時の慣習に従い、「黒人」「白人」という呼称を使うことにする。黒人はアフリカ出身者およびアフリカ出身者の子孫を指す言葉として、白人はヨーロッパ出身者および祖先がすべてヨーロッパ出身者である者を指す。

<sup>2</sup> 特に断りがない限り、引用部分はすべて拙訳による。

の背景には、平等を説く啓蒙主義の理念や奴隷制廃止論などに対抗するための奴隷制正当化の高まりや、産業革命時の自由競争下における白人側の地位喪失の恐怖、アングロサクソン優越論の輸入、人種を巡る疑似科学（自然史）などが要因としてあった（Frederickson, 1971, pp. 3-96; Gossett, 1965, pp. 32-83; Smedley, 1999, pp. 150-265）。

特に、アフリカ系への差別を正当化しようとする人種主義は強く、歴史学者トーマス・ゴセットによれば、アメリカでは白人と先住民との関係よりも、黒人との関係こそ“最も強力な人種主義の教義へと合理化”された（Gossett, 1965, p. 28）。また、歴史学者ジョージ・フレデリックソンによれば、1830年代頃から、白人の黒人に対する一般的偏見が人種主義というイデオロギーへと変貌していったという。つまり、黒人を奴隷（あるいは元奴隷）として無知で卑しい集団と見なしていた偏見が、キリスト教や独立宣言に基づく奴隷制廃止論に対して奴隷制擁護派が奴隷制を合理化しようとした結果、当時の疑似科学（骨相学など）と連動し生物学的な本質主義へと練り上げられていったものだというのである。人類は単一ではなく人種はもともと別々の（生物学的な）種として創造され、黒人は劣等な種ゆえ奴隷状態に置かれることはごく自然なこととされた。また、南部での1831年の黒人ナット・ターナーによる奴隷反乱後は、黒人は主人によって管理されていれば“幸福で、忠実で、情愛の深い”存在であるが（しばしば子供や犬の比喩が使われる）、そうした管理がなければ“野蛮な獣”になるというイメージが作られるようになる。フレデリックソンは、1840～1850年代には、人種は根本的に異なるという生物学的決定論が一般的前提になっていたと指摘している（Frederickson, 1971, pp. 3-101）。

このイデオロギー形成期における白人の文学を概観すると、様々な人種偏見が散見できる。フレデリックソンが人種主義の始まりを指摘した1830年代の文学で最も特徴的なのは、奴隷制擁護のために造型された黒人の登場である。たとえば、当時ベストセラーとなった、辺境の白人と先住民との戦いを扱ったウィリアム・ギルモア・シムズ（William Gilmore Simms, 1806-1870）の『イエマシー族』（*The Yemassee*, 1835）という小説で、自由人にしてやるという主人の申し出を断る奴隷ヘクター（Hector）が登場する。ヘクターは、自由になったとしたら泥棒をしたり飲みつぶれたり、病気で野垂れ死にしたりするだけだ、黒人にとって自由とはそういうものだ、自分にはご主人様と飼い犬がいればそれで十分ですと言い、主人ハリソン（Harrison）大尉は深く心をうたれる（Simms, 1835, pp. 224-225）。また、ジェイムズ・カーク・ポールディング（James Kirke Paulding, 1778-1860）の西部開拓小説『おーい、西

だ!』（*Westward Ho!*, 1832）でも似たような場面が登場する。奴隷ポンペイ（Pompey）が主人デンジャーフィールド（Dangerfield）大佐に従って西部へ移住する途上、ポンペイを自由にしてやるという紳士と出会う。ところが、その瞬間、ポンペイの前に物乞いの黒人が現れ、次に冒険的な言葉を吐く黒人の母子が通り、さらに警官に取り押さえられた黒人の窃盗犯が通っていく。ポンペイは彼らが“自由黒人”だとわかると、即座に自由になることを断る（Paulding, 1832, pp. 64-65）。自由黒人が突然次々に現れるという、この非現実な場面は、先の『イエマシー族』（白人）読者の感動を狙う感傷的な場面と同様に、奴隷制を正当化する機能を持つ。黒人は奴隷である方が幸福であり、自由になると不幸になると暗示しているからである。黒人登場人物の描写は平坦で興行きもなく、彼らはただ忠実で従順なだけであり、作者の政治的な意図を伝える道具になっているのである。

黒人がわずかに登場するこれら二作品とは異なり、ジョン・ペンドルトン・ケネディ（John Pendleton Kennedy, 1795-1870）の『スワロウ・バーン』（*Swallow Barn; or, A Sojourn in the Old Dominion*, 1832）には、黒人が何度も登場する。このフィクションとしての旅行記は、ニューヨーク出身の語り手リトルトン（Littleton）が、ヴァージニア州の農園主メリウエザー（Meriwether）宅に何週間か滞在するというものである。リトルトンによると、メリウエザー農園の黒人たちは“比較的快適な生活をする、満足した（contented）”人々であり、“他の社会階層で私がしばしば目にしてきたよりも生活の苦勞や悩みがはるかに少ない”という。また、“単純な精神構造で、思索を楽しむ能力も不足している”ので、新奇なものを求めない“満足した人種（contented race）”だと述べる。さらに、個々の黒人を描写するとき、リトルトンはしばしば動物の比喩を使い、彼らを猿やアヒル、カメの群れなどに喩える。息子を溺愛するルーシー（Lucy）という黒人老婆の逸話を紹介するときも、その愛情を“動物的な衝動”と見なし、母親の小屋からこっそり出て行く息子の様子も“夜に獲物を求める動物”に喩えている。こうした黒人たちをリトルトンは否定するどころか、“軽んじられている種族”だと同情的に述べ、世間から親切にされるべき“好ましい特質”を持っているのだと結論づける（Kennedy, 1832, pp. 57-58, p. 225, p. 227, p. 240, pp. 242-244）。黒人奴隷の幸福や満足、単純さを説くリトルトンの描写に奴隷制正当化の狙いがあることは明白である。リトルトンにはまだ本質主義的な人種観はなく環境の影響を前提にする姿勢があるが、その黒人像は後の人種主義に受け継がれていくことになる。黒人たちを微笑ましい目で観察し好感を持っているように見えるが、それは家畜か愛玩動物に対する嗜好でしかない。

人種主義への過度期にあるケネディの作品とは異なり、1850年代の文学になると、人種主義がすでに確立している様子が見取れる。奴隷制廃止を訴え、19世紀アメリカでは聖書に次ぐ最大のベストセラーと言われるハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-1896) の『アンクル・トムの小屋』 (*Uncle Tom's Cabin, or Life Among the Lowly*, 1852) では、人種と人の性質は結びつくということが前提になっている。小説序文で、ストウはアフリカ人種の性格は“アングロサクソン人種 (Anglo-Saxon race)” (= 白人) の“冷淡で支配的な”性格と“本質的に (essentially)”異なることを述べる。そのアフリカ人種の代表である主人公トムは“優しい人種 (kindly race)”が持つ“柔和で感じやすい性質 (nature)”ゆえに、常に“純真なもの、子供らしいもの (simple, childlike)”を好む傾向があり、主人の子供イーヴァ (Eva) と仲良くなる奴隷として描写されている。この「純血」のアフリカ人種トムに対し、別の黒人奴隷であり、白人の父親を持つ“混血 (mulatto)”のジョージ (George) は、“自分の血の半分”を占める“短気で性急なサクソン人”の血を危険なものとし、敬虔なキリスト教徒である妻の助けを求める人物にされている (Stowe, 1994, p. xiii, p. 127, p. 376)。物語の展開でも、従順で温和なトムは主人の虐待に耐え忍びながら亡くなっていくが、反抗的で自由を求めるジョージは逃亡を企てカナダへの脱出に成功するというように、2人の人生は対比されている。その対比を生み出しているが、この小説では人種の血になっているのである。つまり、1830年代の文学とは異なり、ストウの小説では人種は本質的なものとして、その人間の性質を決定づけるものなのである。そして、皮肉なことに、奴隷制を糾弾し、黒人を評価しようとするストウの黒人像は、トムの従順さや純真さを強調する点で、先に挙げた1830年代文学の黒人ステレオタイプと重なっており、前時代の人種偏見の存続が見られるのである。

## 2. クーパーの文学にみる黒人表象 — 『レッド・ロウパー』を中心に—

ジョイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper, 1789-1851) は、ポールディングとケネディの間の世代に属するが、主に1820年代から1840年代に活躍した作家である。「革脚絆物語群」 (the Leather-Stocking Tales) と呼ばれる、辺境での白人と先住民との関係を扱った五部作が主要作品ゆえ、先住民表象の研究が主流で、黒人表象が扱われることはほとんど皆無であった。しかし、クーパーの作品でも1820年代の作品には僅かながら黒人が登場し、その人物像は興味深いものである。

クーパーの黒人像を考察するうえで、「革脚絆物語

群」の中の一作『モヒカン族最後の者』 (*The Last of the Mohicans; A Narrative of 1757*, 1826) は示唆的である。この小説は18世紀半ば、まだアメリカが植民地であった時代の、英軍と仏軍の戦い、それに絡み合う先住民の戦いを背景とした歴史ロマンスである。主人公の若き英軍少佐ヘイワード (Heyward) にはアリス (Alice) という恋人がいる。ヘイワードがアリスの父親で上官でもあるマンロウ (Munro) 大佐に結婚を申し込むと、マンロウはアリスの姉コーラ (Cora) が、西インド諸島で一緒になった先妻の子であることを明らかにし、その妻の祖先には“あの不幸な階層の人々” (黒人奴隷を指す) がいたという事実を明かす。そして、“そうした不幸な人々”が“より劣った人種 (race)”だと考えられている“南部” (マンロウがスコットランド出身ゆえイングランドを指すと思われる) で君は生まれた、コーラではなくアリス (母親はスコットランド人) を結婚相手に選んだのはヘイワード家の血が“卑しめられた (degraded)”血と混じり合うのを恥と思ったからではないかとヘイワードを問いつめる。これは、黒人奴隷の血が混じっているとはいえ、娘のコーラを侮辱することは許さないという激しい態度である。それに対してヘイワードは“天に誓って、私の理性 (reason) に相応しくない偏見 (prejudice) とは無縁です”と答えるが、同時に“そのような感情” (= 偏見) が“まるで自分の性質の一部であるかのように根深いものであることに気づいて”もいる (Cooper, 1983, pp. 158-159)。この場面で重要なのはヘイワードの差別意識ではなく、黒人を劣等と見なさない地域 (スコットランド) がありうること、また黒人を劣等と見なすのは“偏見”であることが暗示されていることである。こうした観点は、先に取り上げた同時代の文学にはまったく見られない。人種偏見が“理性”と対比されていることから、クーパーには啓蒙主義の影響が色濃くあり、その立場から人種偏見には批判的であることが読み取れる。

しかしながら、『モヒカン族最後の者』全体を見ると、クーパーの黒人に対する姿勢は曖昧である。なぜなら、コーラはアリスに比べると勇敢で意志が強く、当時の文脈では「女性らしくない」「淑女らしくない」人物像にされているからである。さらに、アリスは戦争を生き延びて、最後にヘイワードと結ばれ大団円を迎えるが、コーラは先住民に殺されるという結末になっている。コーラにもアンカスという先住民の青年が秘かに心を寄せているが、このアンカスも戦争で亡くなっている。つまり、白人同士の結婚は認められながら、異人種同士のそれは回避された結果になっていることがわかる。クーパーが当時の人種意識や偏見から完全に自由になっているとはいえず、それが小説に矛盾した形で表れているのである。

『モヒカン族最後の者』では混血という間接的な形

で黒人が扱われたが、黒人が主要登場人物の1人として現れる唯一の作品が、『レッド・ロウバー』(*The Red Rover, A Tale*, 1828)という海洋小説である。この小説はやはり植民地時代のアメリカ、1759年の東部沿岸地域が舞台になっており、レッド・ロウバーという伝説的な海賊と、ロウバーに対峙する若き英海軍士官ワイルダー(Wilder)の物語である。このワイルダーには20年間、後見人であり部下でもある2人の平水夫がいて、1人が白人のフィッド(Fid)、もう1人が黒人のシピオ(Scipio)である。ワイルダーが主人公ではあるが、この3人は一心同体ともいえる間柄で、クーパーは1人の黒人を小説の前面に出すという大胆な試みをしている。そして、この小説が「草脚雑物語群」のような、内陸の辺境ではなく、海洋の、船乗りの世界を舞台にしていることは重要である。なぜなら、歴史学者のW. ジェフリー・ボルスターによると、船乗りの世界では技術や経験が物をいい、また独特の序列や役割分担があったため、少なくとも1830年代頃までは、陸の世界で考えられない人種間の平等が見られ(労賃などで)、黒人水夫は人種差別からかなりの程度自由になっていたからである(Bolster, 1997, pp. 68-229)。クーパー自身、イエール大学中退後、1805年から1810年まで商船水夫と海軍水夫を経験しており、そうした当時の状況に精通していたと考えられる。

これまでに『レッド・ロウバー』のシピオ像を本格的に扱った唯一の論考(おそらくクーパー文学の黒人像を中心に論じた唯一のもの)は、ジェームス・ウォレスのものである。ウォレスは、人工的な黒人英語を話し、ワイルダーに超人的な(非現実的な)献身を尽くすなど、シピオにはステレオタイプの黒人像が見られるものの、精神的な強さや勇敢さといった特質も見られるとして、一定の評価をしている。また、小説ではシピオの知力のなさが暗示されているが、それはシピオだけでなく他の平水夫たちも同様であり、特に友人の白人フィッドとはまったく同等に描かれている、それゆえ、知力の差はあくまで環境の産物であり、遺伝子(人種)の産物だとはされていないという興味深い指摘をしている。

シピオの性格造型の肯定的な側面、およびクーパーの啓蒙主義的立場に関するウォレスの指摘は示唆に富むが、シピオの表象はより複雑であり、詳細な分析を要すると思われる。まず、ウォレスはシピオとフィッドとの対等な友情関係を強調しているが、2人の関係はそれほど単純ではない。フィッドには明らかに人種意識があり、シピオを「アフリカ人」「黒人」として下に見ているからである。フィッドはシピオには自分のことを「フィッドさん(Misser Fid)」と敬称で呼ばせる一方、シピオを呼ぶときは、この名前以外に「ギニー」(当時、西アフリカの沿岸地方を指した)

「黒んぼ」「黒人」と地理的・人種的な呼び方をしている。フィッドがシピオに話しかけたり、シピオに言及したりするときは度々、彼が黒人もしくはアフリカ人であることを強調し、たとえば2人が最初に小説に登場する場面でも、自分の言葉の間違いを指摘されると「岸にいるカラスの奴らのようにカーカー鳴きやがって」と言い、「黒んぼ」には「血統の良いもの」(=白人)に常識を説く権利などないと怒っている。フィッドは「神様は黒んぼを頭の悪い動物(unrational animal)、ベテランの船乗り(experienced seaman)にお創りになった」と述べているが、この矛盾する言葉(“animal”と“seaman”)は、フィッドの両面感情をよく表している。仲間の船乗りとしては評価しているが、劣った人種(出身)として一線を引き、自分を優位にしたいのである。これは、長年の同志であると同時に、同じ平水夫として仕事を取り合うライヴァルでもあるシピオに、白人フィッドが親しみと敵対心の両方を持っているためと考えられる(Cooper, 1991, p. 35)。

しかし、語り手によるシピオの描写を見ると、ウォレスの指摘のように、人種というカテゴリーとは相反する環境決定論の影響がみられる。それはシピオの知力だけではなく、その振る舞い全体に及んでいる。たとえば、『スワロウ・バーン』から『アンクル・トム』にまで見られる「従順な黒人」というステレオタイプに対して、クーパーはシピオの「従順さ」が、ただ「慣習に従った」ものであり、「あまりにも長い間、卑下するよう訓練されてきて反抗することができなくなった」者の「柔和さ」に過ぎないと仄めかしている。ここには、ステレオタイプへの疑義と同時に、そうした「従順さ」を生み出している差別体制への批判も読み取れる。フィッドとナイチンゲール(Nightingale)という水夫が航海技術について口論になったとき、フィッドが自分の意見の正しさを証明するため、シピオに意見を求める場面がある。ここでナイチンゲールは「黒んぼ」の意見を「白人の面前」に持ち出すことはマナー違反だと叫ぶが、この言葉を語り手は「周囲の者たちの偏見(prejudices)への訴えかけ」と述べ、明確に「偏見」という否定的な意味合いを込めている。また、シピオのことを語り手は「非常に長い間、非常に辛抱強く耐え忍ばれてきた、不当な待遇や辱め」を受けてきた者と述べており、シピオの最期に立ち会う牧師も「不当な待遇や辱めの終わりも近づいている、彼はまもなく人の世の不正(injustice)の届かない遥か遠くへ旅立つのだ」と同じようなことを言っている。このシピオが死ぬ場面では、フィッドも「肌の色という考え」に熱くなったときはシピオを「踏みつけすぎて」しまった、神様にもお前にも許しを請いたいと述べ、自身の人種差別を悔い改めている。こうした描写や台詞はごく短いもの

だが、作者がさりげなく不当な差別を糾弾していることが読み取れるのである (Cooper, 1991, p. 35, pp. 50-51, p. 69, p. 424, p. 426)。

最後に、シピオの人物像でもっとも際立っている特徴について触れなければならない。それは、フィッドが黒人を“ベテランの船乗り”と言ったことと関係している。この小説では、シピオの船乗りとしての高い技術や優れた能力が何度か暗示され、それは白人フィッドのそれを上回っている。たとえば、湾外に停泊する奴隷船（正体はロウバーの海賊船）の意図についてフィッドとシピオが討論になる場面で、素人のやり方だと馬鹿にするフィッドに対し、風流や海流を計算しているというシピオの方を、上官のワイルダーは正しいと肯定している。同じような場面はもう一度繰り返され、先に触れた、フィッドとナイチンゲールとの口論の場面で、フィッドの意見を支持したシピオを“黒んぼ”として除外しようとしたナイチンゲール（ロウバーの手下）に対し、ロウバーがシピオの方が正しいと述べ、ナイチンゲールは逆に貶められる。さらに、ロウバーはシピオの“冷静さ”と“行動力”を称賛し、遠方にある不審船の進路や外観、規模などを肉眼で正確に述べるシピオの能力に驚嘆する。シピオに対抗心のあるフィッドも、かつて同じ船で働いているときにハリケーンに合い、海に落下した自分をシピオが飛び込んで救ってくれたと率直に告白し、その“船乗りの腕前 (seamanship)”についてはシピオの“右に出るものはほとんどいない”ことを認めている (Cooper, 1991, pp. 36-37, p. 51, p. 291, p. 332)。

そして、この小説において、この“seamanship”という言葉は重要である。かつて船乗りだったクーバーは『レッド・ロウバー』で、船乗りという職業を「専門職」(profession)と強調し、誇り高い職業として称えている (Cooper, 1991, p. 119)。2人の主人公ワイルダーとロウバーに関わる資質も、この“seamanship”であり、小説は、まだ若く未熟なワイルダーが、好敵手でありながら指導者でもある経験豊富なロウバーに、“seamanship”を学んでいくというモチーフが中心になっている。つまり、“seamanship”は小説の中心的なテーマになっているのであり、シピオの特質がそれと関わっていることは興味深い。必然的に小説におけるシピオの地位は著しく高められるからである。このことは、シピオを知力・体力とも劣等とはいえないことを読者に印象づけ、かつ、「黒人」というよりも「船乗り」というアイデンティティーを前面に出す効果がある。クーバーはシピオを船乗りの professionalism と結びつけることで、偏見に満ちた人種カテゴリーから自由にする可能性を開いているのである。

### 3. おわりに

これまで見たように、『レッド・ロウバー』のシピオ像には人種偏見に縛られない要素が読み取れるが、それでもいくつかの問題はある。小説の山場でのワイルダーらとロウバーらとの戦闘で、シピオのみ亡くなり、ワイルダーとフィッドは生き残ることになる。しかも、シピオはフィッドとワイルダーを守るため身を挺して戦い、敵に殺されるのである。ウォレスが「超人的な献身」として批判したこの場面は、主人に尽くす忠僕を描く歴史ロマンスの形式に従っており、ステレオタイプ的であるといえる。また、その後のシピオの死を嘆き悲しむフィッドとワイルダーとの場面は感傷的で、読者の感動を誘うようメロドラマ化されている。こうした点は、『イエマシー族』の忠実な奴隷ヘクターを彷彿とさせるものであり、シピオは物語を面白くするための道具にされているという感否めない。また、小説の最後は独立後のアメリカとなっており、年老いたロウバーが（甥であると判明する）ワイルダーとともに、独立戦争での勝利に歓喜する場面開幕を引くが、そこにフィッドの姿はあってもシピオの姿はもはやない。このナショナリズム色の強い小説で、シピオのみ「アメリカ人」になれない結末になっているのである。さらに、小説全体を通して、フィッドに比べるとシピオの台詞や描写は少なく、シピオが自己主張を控え英語も上手く話せないことを考慮したとしても、主要登場人物として十分に個性化されているとはいいたい。

このようにシピオ像には数々の問題点は散見できるものの、同時代の文学作品と比較するとき、クーバーのテキストが驚くほど当時の人種偏見から自由であることがわかるだろう。『イエマシー族』や『おーい、西だ!』、『スワロウ・バーン』に見られた、奴隷制や差別の正当化は『レッド・ロウバー』には見られない。逆に、そうした差別の醜悪さが暗示されている。また、白人フィッドと黒人シピオとの間の対等な仲間関係を設定するという大胆な試みもしている。先に述べたようにフィッドには人種意識が見られるが、瀕死のシピオを早く海に放り投げようとする海賊たちに対し、シピオの体と自分の体をロープで結び、“同じ釜の飯を食った仲間 (messmate)”に最後の言葉を伝えている“水夫 (seaman)”を海に投げるというのか、お前らの中でこの男の腕前にかなう奴がいるか、(この男のように) 病気の仲間のために自分の飯をあきらめられる奴がいるか、腕の弱った仲間のために二倍働いてくれる奴がいるのかと激昂して言い放つ (Cooper, 1991, p. 427)。そこには、24年間寝食を共にした仲間への思いが詰まっており、シピオは黒人というよりも唯一無二の親友となっている。クーバーにとって、誰もか“messmate”となりうる船乗りの

世界は、肌の色という呪縛からの解放を夢見れる世界だったのかもしれない。

#### 引用文献

- Bolster, W. J. (1997). *Black Jacks: African American Seamen in the Age of Sail*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Cooper, J. F. (1983). *The Last of the Mohicans; A Narrative of 1757*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Cooper, J. (1991). *The Red Rover, a Tale*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Douglass, F. (1994). *Autobiographies*. New York: Library of America.
- Frederickson, G. M. (1971). *The Black Image in the White Mind: The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817-1914*. Hanover, NH: Wesleyan University Press.
- Gossett, T. F. (1965). *Race: The History of an Idea in America*. New York: Schocken Books.
- Kennedy, J. P. (1832). *Swallow Barn, or a Sojourn in the Old Dominion*. Vol. 2. Philadelphia: Carey & Lee.
- Paulding, J. K. (1832). *Westward Ho!* Vol. 1. New York: J. & J. Harper.
- Smedley, A. (1999). *Race in North America: Origin and Evolution of a Worldview*. Boulder, CO: Westview Press.
- スメドリー, オードリー (2005). 北米における人種イデオロギー 山下淑美 (訳) 竹沢泰子 (編著) 人種概念の普遍性を問う 人文書院. pp. 151-181.
- Simms, W. G. (1835). *The Yemassee*. Vol. 2. New York: Harper & Brothers.
- Stowe, H. B. (1994). *Uncle Tom's Cabin*. Ed. Elizabeth Ammons. New York: W. W. Norton & Co.
- Wallace, J. D. *The Black Sailor and The Red Rover*. <<http://external.oneonta.edu/cooper/articles/suny/1995sunny-wallace.html>> (December 28, 2014).